

発行所：ユダヤ・アラブ青少年共学共存推進日伊支援会



ケレン・ハオール、第6号、2010年4月10日発行

ハーモニーは民族と宗教を越えて

シャニー・ガールズ（ユダヤ・アラブ）混成合唱団



(写真提供:エズレル・アート・センター)

私は、1月22日～2月8日まで、短期間ですが日本に帰国していました。京都の一燈園を訪問中、シャニー・ガールズ合唱団と呼ばれるユダヤ人とアラブ人の混成女声合唱団がエズレル平原にあることを知らされました。

イスラエルに帰ってから早速キブツ・ダリアのメンバーである知人の音楽家に電話をしました。「ああー、僕の教え子とその合唱団の指揮者だよ。彼

女はお隣のキブツ、エイン・ハショフェットに住んでいるよ」。

それからすぐ、電話でアフラの町の近くにあるエズレル・アート・センターの渉外係と連絡が取れました。そして、「3月8日に国際婦人デーの集会在エズレル短大であります。その集会の開幕でシャニー・ガールズ合唱団が公演します。いらっしゃいませんか」と招待を受けたのです。

その日、私は車を運転してエズレル短大に出かけました。13歳～18歳までのユダヤとアラブの少女たちが、会場全体を美しいハーモニーで包み込みました。舞台に立っている少女たちは、誰がユダヤ人で誰がアラブ人か識別するのが難しいほど一体でした。歌い続けて7年、民族と宗教（ユダヤ、イスラム、キリスト教）を越えたハーモニーを醸し出していました。シャニー・ガールズ（ユダヤ・アラブ）混成合唱団についての詳細は次号に掲載予定です。（松村記）

ハンド・イン・ハンド・エルサレム校 父母たちへのインタビュー



中島ヤスミン

私は将来、娘をエルサレムのハンド・イン・ハンド（Hand in Hand）幼稚園に通園させたいと思っている。私は子どもをハンド・イン・ハンドに通学させている親たちに興味を持ち、昨年12月、仕事の合間をぬって、それぞれ宗教の異なる親たちにインタビューしてみた。今回からシリーズで父母たちの意見を紹介する。

平和に共存できる未来に確信

モハメッド・アイードのプロフィール

モハメッド・アイード、(アラブ人父親)

子供を通わせた動機は？：子どもに異なる文化を知ってもらうこと、そしてアラブ文化を自覚する機会を与えたかった。私はヨルダン王国時代の東エルサレムに生まれた。幼少時のイスラエルユダヤ人のイメージは、メディアによって形づくられたもので、私は彼らも同じ人間とは思っていなかった。1967年に東エルサレムがい

宗教： イスラム教徒

職業： タクシー・ドライバー（現在）

出身地： アブ・ディス（Abu Dis）

学歴： アメリカ・カンザス大学卒業

息子： 15歳 Hand in Hand エルサレム

校に在学中（HIH 歴 9年）

スラエルに併合され、初めてユダヤ人に会った時、私と同じ人間だということに気づいて、まず驚いた。その後私はアメリカ、ヨーロッパ、中東諸国で過ごし、世界にはいろいろな人、いろいろな文化が存在することを知った。そして異なる文化の中でも共通事項を探すことの重要性に気がついた。そのような広い理解力を子どもにも持つてほしいと思った。

たま現在のイスラエル社会ではユダヤ系の方が社会的に成功する可能性が高いのでそのユダヤ社会を知ることは、将来子どもにとって有利だろうと思った。

HIH の教育方針は、ユダヤ社会を子どもに押し付けるものではなく、アラブ人にイスラム教徒としてのアイデンティティを自覚させ、それを誇りに思う教育でもある。私はこれは素晴らしいことだと思う。

実際に子どもを通わせて何か変わったことは？：アラブ人ユダヤ人の子どもたち同士が自由に往き来している。これはとても素晴らしいことだ。HIH 校ができる前、私は2歳3カ月の息子をユダヤ人地区の保育園に通わせた。息子は、保育園で唯一人のアラブ人だった。しかし先生たちは息子に一目置いて大事に育ててくれた。当初息子はヘブライ語がわからなかったけれど、3カ月で話せるようになった。また、一度他の子どもに「アラブ人は悪い」と言われ、傷ついて帰ってきたことがあった。息子に「ユダヤ人も悪い」と言い返せと言った。でも、「ユダヤ人にも良い人がいるようにアラブ人にも良い人がいる」こと、そして、ものごとには二面性があることを教える良い機会になったと思っている。

多くの親たちは同じ目的で子どもを HIH に通わせている。親同士は仲が良く、それを見て子どもたちも仲良くなっていると思う。私たちはアラブ人地区に住んでいるが、我家に泊まりに来たユダヤ人のクラスメートが、「ここはとても良い所だから、ここに住もうよ」と親に電話しているのを聞いて嬉しかった。また子どもの誕生日パーティに息子のユダヤ人の友達を招いた時、子どもをアラブ人地区に行かせることを懸念する“新米の親”がいた。経験のある親たちが「彼らは大丈夫。責任をもって子どもたちを預かってくれる」と言ってくれた。これも嬉しかった。

高校を終わってユダヤ人生徒が軍隊に行くに当たって：3年後にはユダヤ人の子どもたちは兵役に行くが、もしウエスト・バンクのチェック・ポイントで息子が学友に会ったら、2人は抱き合って再会を喜ぶだろうと私は確信する。

良い点、悪い点は？：強いてあげれば：多くのアラブ人が子どもに良い教育を与えようと思ったら、私立のキリスト教系の学校に入れる。私もかつてそうだった。そこでは確かにキリスト教文化などは学べるが、民族的にはアラブ人生徒のみだった。HIH 校ではユダヤ教、キリスト教、イスラム教の文化も

学べるし、ユダヤ人のことも知ることができるので良いと思う。どのみち自分の息子には宗教原理主義者にはなってほしくない。他者との違いよりも、「同じであること」にも注目できる子になってほしい。

強いて悪い点を言えば、男女交際がオープン過ぎることで、アラブ社会ではそれらは秘めごとであり、自分の時代には考えられなかった。しかし今の時代を昔と比べても仕方がないのかもしれない。

また、今は分断の壁のため、学校に行くのに迂回しなければならず、通学に片道40分以上かかる。月謝は通常の公立に比べて高く、年間6-7千シェケル（約1600～1900ドル）かかる。この出費は今の私には負担が大きいが、それでもがんばって通わせたい。

周囲の反応は？：あこがれと嫉妬が入り交じった感情だね。私は、アブ・デイスに住んでいるので、周囲の人々はまだイスラエルに対して偏見を持っているのを知っている。しかし私は周囲から意志の強い人間と思われており、あまり非難されることはない。また誰かがそのようなことを言う時は、私の考えをきちんと伝えられるので、あまり気にしていない。また私たちの住んでいる地区は大方がイスラエル国籍を持っていないので、HIH 校に通わせることができない。しかし、きっと多くの親がうちの息子を見て、できれば子供たちを HIH 校に入れたいと願っていると思う。私の親戚は理解を示している。息子には同年代の従兄弟たちがいて、とても仲が良い。また息子は周りの子どもたちにある意味で新風を吹き込んでいる。例えば息子の誕生日に HIH の子供や近所の子を招いて、普段接する機会がない子どもたちにお互いを知る機会を与えている。その時に、あこがれと同時に嫉妬に似たものを感じることもある。その点では子どもたちの関係に注意している。大まかに言って、息子はリーダーシップをとる性格で、周囲から一目置かれている。息子が8歳のころ、一度だけ従兄弟と同じアラブの学校に行きたいと言った。子ども心として、一緒にスクールバスに乗りたかったためだ。数カ月後、まだアラブの学校に行きたいかと聞いたら、HIH にそのまま残りたいと答えてくれた。

父親として、子どもには私が最高と思う環境を作ってあげたい。自分が子供の時に得られなかった、異文化理解と共存という機会を子どもに与えることができるのは嬉しい。また、今のところ息子は私に何でも打ち明けてくれるので、助けが必要な時にはいつでも助言できるようにしている。

このような方法が将来、両民族間の共存に繋がると思うか？：もちろん。みんながこのような環境に育てば、両民族が平和に共存できる未来が絶対に来ると私は確信している。

ギバット・ハビバ ユダヤ・アラブ平和教育センター60周年記念祭 (2009年11月19日)

リディア・アイゼンバーグ (Lydia Aisenberg)

静かな証人、ユーカリ並木

高く太いユーカリの樹が「ギバット・ハビバ — ユダヤ・アラブ平和教育センター」の小道に沿って並んでいる。もしこのユーカリ並木に物語を語る能力があったら、このユダヤ・アラブ平和教育センター創設60周年祭に集まった約600名の参加者と、とてつもなく面白い物語を分かち合うことができたであろうと思う。



ハビバ・ライクの記念碑序幕：写真提供、リディア

イギリスの委任統治時代（1917～1948年）、ここはイギリス軍の基地であった。このユーカリ並木は当時イギリス駐屯兵により植樹され、波乱の歴史をのりこえ、現在まで静かな証人としてこの地に根をおろしている。イギリス兵が撤退した後、ここにキブツ・アルツィ連合（注1）のパイオニ

ア・メンバーにより教育センター建設の仕事が始まった。その後、英国空軍パラシュート部隊に従軍した女性兵士、ハビバ・ライク（注2）の名がセンターの名前となった。ハビバ・ライクはパラシューターとして訓練を受け、スロバキア戦線に降下する大胆な作戦に参加し、帰らぬ人となった。戦争が荒れ狂っているヨーロッパの前線に降下する以前は、ギバット・ハビバに隣接するキブツ・マアニットのメンバーであった。

これら同じユカリの並木は、ギバット・ハビバの特徴として知られている。そしてこの60年間、この並木は、多くのイスラエルのユダヤ人とアラブ人が2民族間の対話を進め、同等の市民権を分かち合うための教育企画に参加していることを、静かな証人として見守り続けている。これらの企画は国の内外から絶えず要請されているもので、ギバット・ハビバ活動の「核」となり、常に時代の試練に耐えている。

世代のギャップのない仲間、ハショメル・ハツアイール

2～3世代に渡るイスラエルのユダヤ人、イスラム教徒、キリスト教徒がギバット・ハビバ創設60周年記念祭（09年11月19日）とハビバ・ライク処刑65周年追悼式に参加した。参加者は今日「黄金の世代」と呼ばれる創設世代から10代の若者まで広がっていた。行事が進行する過程で、ベテランと若者は一般に言われている「世代のギャップ」より、はるかに多い共通事項があることに気づいた。彼らはお互いに共通の動機と実行力を持ち合わせている。若者は年とったベテランを模範とみなし、ベテランは人類に貢献しようという若者がまだ存在すると知って満足した。過去と現在のハショメル・ハツアイール（注3）のキブツ・メンバー、都会の人たち、近隣や遠方からやってきた村人たち全員が、共存のための企画、平和の追求、平等社会の支持者である。海外からのハショメル・ハツアイールの支持者もこれらの人たちと共に参列した。そして、長い間試練に耐えたハショメル・ハツアイール運動の信念である価値、原理、思想のもとに感動的な日を過ごした。今日の極端に厳しい状況の中でも、彼らはこれらの信念を守るために闘い続けるだろう。これは勇敢な女性、ハビバ・ライクが正しいと信じて命をかけて献身した道でもある。

ドイツからの贈物

ハビバ・ライク記念碑の序幕後、参加者は敷地内に点在する色々な調査研究室や展示室を見学した。美術センターに附属している「平和ギャラリー」では、折しも新しい展示会開催のテープが切られた。ここでは、ギバット・ハビバ・ドイツ支部会員のフリーデル・グルツマアヒェル氏より、美術センターの所長エティー・アムラン女史にビデオカメラが贈呈された。このカメラはプロ用で強い印象を与えた。

フリーデル・グルツマアヒェル氏は1991～2006年までグリーン・パーティーの代表としてドイツの国会議員を勤めた。「ドイツを巡回している写真展、〈異なった視覚〉はドイツでもよく知られている。このビデオカ

メラを使用して〈異なった視覚〉コースに参加する新しい若者が創作する作品を鑑賞できる日を楽しみにしている」と語った。

2つのパネルディスカッション

第一パネルディスカッションでは、著名な政治家、教育家や芸術家の出席のもとに、キブツの過去を深く掘り下げ、現在急速に進んでいる私有化を分析し、キブツのユニークな生活様式と教育方法を将来に継承する道を探った。イスラエル社会に建設的な影響を及ぼし続けていくためである。

第二パネル・ディスカッションでは、ユダヤ人とアラブ人が参加して「平等社会」について討論した。イスラエル国家で平等な市民であるはずの2民族の間に、深い格差があることに焦点があてられた。現在存在している教育企画やその拡大策を強化し、2民族間の会合を継続、促進していこうという結論になった。

ギバット・ハビバの2つの賞

その後12人のユダヤ人とアラブ人教育者に「ギバット・ハビバ教育貢献賞」が授与された。また、2009年の「ハビバ・ライク平和賞」が女性歌手であり音楽家のアヒノアム・ニニィ（ユダヤ人）とミラー・アワード（アラブ人）に授与された。彼女たちは、昨年のヨーロッパ歌謡コンテストで共同で作詞・作曲した「もう一つの道があるはず」をヘブライ語、アラビア語と英語でデュエットしたことが評価された。アヒノアムとミラーは、ソロとデュエット歌手として音楽を仲介とし、共存の目的のためにアラブとユダヤ間のかけ橋の役割を果たしている。

記念公演の後、アヒノアムは「ミラーと私はしばしば二人きりで孤立していると感じていました。しかし、この場に来て、こんなに多くの人たちが同じ信念を共有していることを知り、とても勇気づけられました」と語った。

注1： キブツ・ハアルツィ連合：シオニズム（ユダヤ民族主義）と社会主義をかけた、政治的には左翼に属する全イスラエル85のキブツの連合である。1927年に結成された。最初のキブツ集落であるベイト・アルファは、1920年に建設されている。1997年、キブツ・ハアルツィ建設70周年を記念して、ギバット・ハビバのヤド・ヤアリセンター出版部から「キブツ建設70周年、70の顔」が刊行された。それによると、メンバー数は22、291人、キブツに住んでいる総人口は37、162人であった。キブツの私有化が進行している現在、これらの数字は定かではない。キブツの最盛期であった1980年代には、キブツ・ハアルツィと他の運動に属するキブツの総計は230であったという。

注2： ハビバ・ライク：1914年スロバキヤ生まれ。1939年パレチナへ移住。1944年9月スロバキヤに降下、同年10月捕らえられ、11月20日ドイツ軍により処刑された。

注3： ハシヨメル・ハツァイール：1911年、当時オーストリア＝ハンガリー帝国が支配していたガリシア地方にあったルブブの町（現在はウクライナ）で組織された。その思想的背景は、シオニズム（ユダヤ民族主義）、社会主義と民族間の同胞愛であった。この運動は、ヨーロッパ、南北アメリカ大陸のユダヤ人のコミュニティに広がった。第一次大戦後、ハシヨメル・ハツァイール運動に参加していた青年は、イスラエルに移住しはじめ、既存のキブツに参画したり、仲間と新しいキブツの建設に従事したりした。（翻訳と注：松村）

今、できる所から平和への種蒔きを

日本への短期帰国後の思い

松村光子

私は1年前に、イスラエルの友人と NPO「ユダヤ・アラブ青少年共学共存推進日伊支援会」を組織した。もちろん、イスラエルに住んでいる日本人とユダヤ人の友人、そして母国の友人に事前相談した上のことだ。私は異国で正式な組織を発足させるために、かなりのエネルギーを費したように感じた。心身ともに疲れきってしまった。そこで、私たちの「日伊支援会」を支えてくださる方々にお礼をかねて帰国し、日本で休もうと考えた。良き友人と仲間の協力と支援がなければ、この組織は発足できなかったと思う。今までの「我が人生」で恩師、良き友人、知人、仲間に恵まれていると常に感謝している。にもかかわらず、時折ひどい孤独感に襲われた。

私たちの支援会は、発足以来、機関誌「ケレン・ハオール」を発行している。この機関誌を通しての新しい仲間と、昔からの友人知人に会いたいと思い、その旨 E-メールを発信した。次々と歓迎の返信が帰ってきた。日本行きは急に決めたことで、準備も短期間で終わらせなければならなかった。

イスラエル人の友人に、短期日本帰国を電話で告げたところ、「光子、あなたは日本では休めないわよ。イスラエルに帰ってからお休みなさい」と言われた。そして、彼女の高らかな笑い声が受話器を通して聞こえてきた。今回の帰国はまさにその通りになったように思う。しかし、この3週間弱の帰国で日本の縦社会構造の上に築かれた民主主義の妙味を十分味わわせていただいた。先輩が後輩を支え、育てようとする思いやりがある。水平社会の民主主義にはそれなりの厳しい面も存在する。「ケレン・ハオール」を読んでもくださる方々に勇気づけられ、エンパワーされてイスラエルに帰り着いたように思える。

不思議なご縁の一燈園

1月22日夜、成田に到着した。大学時代からの親友佐山さんご夫妻が飛行場まで迎えにきてくださり、3泊お世話になった。それから、栃木県に住んでいる弟たちを訪ねた。29日には新幹線を利用して、京都にある一燈園にお邪魔した。一燈園の当番さん（責任者）の西田多弋止氏とベテラン・メンバーの伊佐山あや子さん、それに日伊支援会との連絡窓口を務めておられ

る浦 俊哉さんに迎えられた。西田氏は視察で、1980年の中ごろキブツ・ダリアにおいでになった。その折、お目にかかった。1月29日には、一燈園の創設者であられ参議院議員も務められた西田天香師の供養祭が行われた。

天香師は1968年2月29日に逝去されたとうかがった。一燈園では毎月29日に天香さんの使っておられた部屋で、簡単な供養祭が行われているそう。私は一燈園到着の日までそのことを知らなかった。不思議なご縁で供養祭に参列させていただいた。

メギドの姉妹町 - 大分県大山町

翌日、1月30日は再び新幹線に乗って福岡に到着した。福岡からバスに乗り換え大分県日田市に向かった。日田市では、イスラエル名誉領事の三苦善八郎氏に迎えられた。「梅と栗を植えて、ハワイへ行こう」というキャンペーンで、農村改革の先頭を切り、一躍有名になった大山町の町長さんを最近まで務められた。大山町は、私の住んでいるメギド地区と1970年に姉妹協定を結んでいる。70年の後半の頃から、毎年人事交流で大山町からメギドに研修に派遣される青年のお世話をさせていただいた。いろいろな思い出のある当時の人たち約20名の方々が1月31日、懇親会を開いてくださった。疲れを忘れて夜遅くまで語り合った。翌2月1日は、三苦ご夫妻に福岡国際空港までお送りいただいて、成田に到着した。これ以降東京近辺に滞在することになった。

昔の仲間、千葉大「英友会 0B」

特に今回は、昔の仲間を非常に懐かしく思った。大学時代のクラブ活動のメンバーである。私は1960年、日米安保条約批准反対闘争が最高潮に達した年に千葉大教育学部に入學した。その年、一期の授業はなかった。クラスでの討論や国会の周りのデモに参加するのが主な日常だった。千葉大は当時“田舎大学”と言われ、国会周辺の状況に疎くデモの際、先頭に立たされ逮捕者が多く出たとささやかれた。構内では都会出身の洗練された学生ももちろん見られたけれど、どちらかといえば素朴で長閑な感じを与える田舎の校風があったように思われる。私はこの雰囲気の中で、The Spoken English Society (SES・英友会)というクラブ活動に参加した。

1960年当時、日本はまだまだ貧しかったように思う。英語を勉強する環境は十分整っていなかった。文理学部と教育学部の2部を併せた英語科に、英語が母国語の外国人講師は一人しかいなかったと思う。NHK 第二放送で英語ニュースを担当されていたフレンド先生だと記憶している。このSESで、いろいろな学部から集まって構成された小グループで英会話を勉強し合った。J.F. Kennedy の就任演説の暗唱、英語スピーチ・コンテスト、合宿、旅行等々、豊かな活動を楽しんだ。

卒業してから、40数年が経過している。昔の仲間がインターネットを利用して連絡し合い、2月4日にお茶の水駅に近い喫茶店で懇親会を開いてく

ださった。遠くは山梨県、神奈川県からもかけつけていただいた。懐かしい人たち。イスラエルに住んでいるため、卒業後初めての再会であった。学生時代、一緒に旅行した友人が、「私、貴方が行方不明になっていると思っていたのよ」と声をかけてきた。ユダヤ・アラブ紛争の地に生活しているので、そう思われて当然かもしれない。この地ですでに6回の戦争に遭遇しているのである。

お互いに歳を刻んで、白髪がきわだっていたけれども、昔の若さが蘇ったように感じられた。10数名の参加者の温かさが私の全身をつつんだ。懇親会の2時間の予定時間は矢のごとく過ぎ去った。会が終わりに近づいたところ、英友会会長の高井英造先輩が「きみ、本を書かないかね」とおっしゃった時には、飛び上がるほど嬉しかった。私は「ユダヤ・アラブ青少年共学共存推進日伊支援会」の仲間に、日本のメディアに伝わらないが、草の根段階で進行しているイスラエル人の2民族共存への努力や良心を伝えたいと思っていた。同時に、私たちの共有財産を作り、活動資金にするために本を出版することを提案していたのである。もし、これが実現すると、私たちは一歩前進することになる。

昔の仲間が醸し出す温かい雰囲気の中で、私の胸には教育学部で1年先輩の斉藤雅子さんの事が思い出された。彼女は美しい澄んだ目の持ち主だった。1970年代後半のころだったと記憶しているが、風の便りに「斉藤さんがカンボジアで行方不明になった」というニュースを耳にした。彼女は、東南アジアから日本の政府資金で留学していたカンボジア人と結婚なさったと聞いていた。私たちが千葉大で勉強していたころは、SESと東南アジアからの留学生の交流があった。私は、彼女の事が長いあいだ気になっていたのである。

偶然、あるいは必然のご縁？

イスラエルに帰る日が迫ってきた2月7日は、杉並区永福町に住んでおられる武田ご夫妻のお宅にお邪魔した。夕刻、小さなパーティーが持たれた。7名の参加者であった。自己紹介の時点で1人を除いて、全員が千葉大出身であることが判明した。実に驚いた。私の友人で建築家の北島さんから、「ケレン・ハオール」が武田さんご夫妻に届いていたことは知っていたが、同じ大学出身とは知らなかった。ご夫妻は昨年6月、聖地巡礼の旅に参加されたそうである。千葉大 OB クリスチャン・グループであった。例外の1人は、ユダヤ人のアナさんであった。彼女は文部省の奨学金を獲得し、昨年から東大の研究室で建築の勉強をしている。日本行きの前、南のベルシェバから1カ月間、週1度私のところに日本語の勉強に通って来た人である。日本での再会を喜びあった。聖地イスラエルに関心をお持ちの方々に、教育分野で展開している共学共存運動の現状を報告した。

2月8日、日本を発つ前日に築地にある朝日新聞本社ロービーでインタビューを受けた。英友会会長の高井先輩のお骨折りであった。高井先輩は成田

行きのバス停まで私に同行してくださった。後輩の世話を最後まで責任を持ってなさる素晴らしさ。甘えると共に心から感謝した。これは、縦社会構造の日本文化の特徴ではないだろうか。

歴史は繰り返す

日本滞在中、私たちの日伊支援会に対して数名の方々から現金で献金をいただいた。イスラエルに到着してから、献金された方々に領収書と感謝の手紙を発送した。そしてその後の返信で斉藤雅子さんの運命を知らされた。

「斉藤さんの件ですが、天野教授も心配しておられましたので、斉藤さんの母校、木更津二高に問い合わせました。木更津二高では捜索隊を出したそうです。しかし、残念な結果だったと聞いております」ということだった。斉藤さんが、ポル・ポトの大量虐殺の犠牲になったことは間違いないように思われ、心が痛んだ。

ホロコーストは、ユダヤ人だけが被った悲劇ではないように思われる。第二次大戦後も世界のどこかで虐殺が繰り返されている。私たちの仲間の中にも犠牲者が存在したのだ。

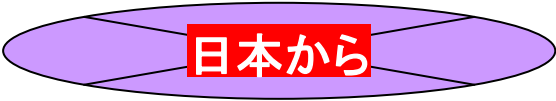
イスラエルには、「鼻の下は見えぬ」という格言がある。鼻の下にある窪みは鏡の前に立たなければ見えない。自分の事を省みず、人の行為を批判攻撃する意味で使われる。私は日本民族の歴史を客観的にも眺めたい。この地上で罪を犯したことの無い潔白な民族国家が存在するのだろうか。民族対立による残酷な虐殺の無い世界、戦争の無い世界が到来する日を夢見ている。私は次の歴史的忠告や提言でこの文章を結びたいと思う。

「人類は戦争を根絶しなければ、戦争によって全滅するだろう。 “Mankind must put an end to war or war will put an end to mankind” (J.F.Kennedy) 」。

「この地上で真の平和を教えようとするなら、また真の反戦活動を前進させようとするなら、子どもたちから始めなければならない」。“If we are to teach real peace in this world, and if we are to carry on a real war against war, we shall have to begin with the children.” (Mohandas Gandhi)

「小さくとも種子さえ真実であるならば、いつか芽をふき実を結ぶ。
“Even a small seed, if it is Truth, will bring forth new buds and bear fruit someday”
(西田天香 Nishida Tenkou, 一燈園 Ittoen)」

今、できる所から平和への種蒔きを共に始めようではありませんか。



日本から

〈読者の声〉

すごい！大変貴重で、有意義な活動 (N.M 神奈川)

「ケレン・ハオール 3号」を読み、感服しました。そしてたくさんのごことを学ばせていただきました。どうしてこのように「手をつなぐ」試みがもつとなされないのでしょうか……とも思ってしまう。

とても感じるところが多かったので、早速幾人かの教会の友人に話したら、興味を示しましたのでコピーを差し上げました。

ひとりは牧師の娘さんで、長い間私と同じように教会学校の教師をしているSさん。彼女のお兄さんもカナダで牧師をしているのですが、国際的な活動もしておられます。中東和平に関しては会議に参加されたり、実際にパレスチナ人の中に入って和平に向けて働かれたこともあるそうです。もちろん、エキュメニカル（超宗教）な視点です。もう1人は現在、私の所属する教会で伝道師をしているU先生（女性）です。もうひとりは、藤沢市内キリスト教連絡会代表をしているSさん。彼はもともとルーテル教団出身なので、そちらにも広めてくださるかもしれません。3人とも、大変印象深く、ユダヤ・パレスチナ和平問題をより身近に感じたようで、更に関心を示されました。

パレスチナとユダヤの人たちが手を取り合う方向は、藤沢教会のメンバー、あるいはキリスト教を離れて私の友人たちの共感、支持を得ていくと思いますので、これから少しずつ中島さんたちの活動をご紹介できれば、と思っています。

応援していますので、頑張ってください！ユダヤ・アラブ平等教育推進ハガール協会のために、そして、ベルシェバ・ハンド・イン・ハンド・ハガール小学校のために、祈ります。

編集後記

今回の「ケレン・ハオール」は、松村さんの力強い奉仕活動が主流となりました。とても頼もしく思います。イスラエル国内で共学共存の奉仕活動続ける私たちは、可能な限り協力しあっていますが、何分にも奉仕活動なので、いつも十分に活動時間を確保できる訳ではありません。今回はそんな時期だったので、松村編集長に負担がかかったようです。反省するとともに、彼女のエネルギッシュな活動に感謝しています。

読者の皆様は 前号および今回の記事によって、国内に多様な共学共存組織があるという事実を認識されたことと思います。このように現在、イスラエル国内には、私たち以外にも、多くの共学共存推進組織が活動しています。これはとても嬉しいことで、相互に刺激しあって、更なる飛躍へと進んでいきたいと思っています。

これからも、私たちケレン・ハオールは日本の皆様からの強いご支援をお願いしたいと思っています。皆様の力は、イスラエル国内での共学共存の活動に新風を吹き込んでいます。皆様の暖かなご支援の下、イスラエルの奉仕活動仲間たちはがんばっていきます。今後とも宜しくお願いいたします。

（山崎（

私たちが「ユダヤ・アラブ青少年共学共存推進日伊支援会」を組織してから、1年が過ぎました。私たちはこれまで全部奉仕活動で頑張ってきました。しかし、事務費と交通費は領収書を基にし、寄付金の中から差し引かせていただきましょうと話合っています。次号で会計報告をしたいと考えています。ご了承のほど、お願いいたします。

私は、年金生活者ですが、山崎、中島はプロの観光ガイドです。クリスマスの12月から美しい春の4月の頃までは、仕事で忙しく飛び回っています。今年は、日本人ガイドが不足しているとか。

日本滞在中、ご多忙中にもかかわらず、私との会合に時間をさいてくださった皆様に、改めて厚くお礼を申し上げます。（松村）

NPO

ユダヤ・アラブ青少年共学共存推進日伊支援会の目的

私達日本人とユダヤ人は、20世紀に人類史上前例のない最悪の惨事、広島と長崎への原爆投下とユダヤ人大量虐殺を経験した。私達は、ノー・モア・広島、長崎、ノー・モア・ホロコーストを叫び、核兵器や戦争、そして大量虐殺のない真の世界平和と民族の共存共生を希求する。

本支援会は、上記の考えに基づいて、イスラエルにおけるユダヤ人とアラブ人青少年の共同教育推進のために、内外に向けて献金依頼活動を行う。そして、イスラエル国内における二民族の青少年共学共存を推進する団体・組織や施設の共学共存教育活動を支援する。本会の機関誌「ケレン・ハオール」を通し、広く協力を求める。

ご支援金送り先

* 読者の提案により、郵便為替口座を設けました。番号は：**ISRAEL POST 21832292**

宜しく願いいたします。

*小切手の場合は：

Mitsuko Matsumura; Kibbutz Dalia, 19239 Israel, または
Toshiaki Yamazaki; Kibbutz Gibat HaShirosha, 48800 Israel

* **銀行送金**の場合は、山崎、松村にお問い合わせ下さい。

* **その他のお問い合わせ先** (E-mail Addresses) :

Mitsuko Matsumura; mitsuko1941@gmail.com (新しいメール住所です)
Aki Yamazaki; yamazaki@netvision.net.il

ケレン・ハオール、第6号

(ケレン・ハオールはヘブライ語で暗闇の中へ差し込む「一すじの光」。希望を意味する)

発行所：ユダヤ・アラブ青少年共学共存推進日伊支援会

Mitsuko Matsumura, Kibbutz Dalia, 19239, Israel

発行日：2010年4月10日

編集：松村光子、山崎智昭、山崎エステル、中島ヤスミン

校正：佐山宏子（成田）、田村徳章（東京）

題字デザイン：Ms. Danit Rot
